



始



特279-423



423

曉烏 敏先生述

神武天皇建國の精神 名家講演集第二篇



まへが

本集は昭和九年三月三十一日、大毎會館で中外日報社の後援のもとに洛南藝苑の主催で開かれた折の曉烏敏先生の『神武天皇建國の精神と河嶺』、『國土莊嚴の誓願』といふ御講演の筆あります。特に本集のたゞに先生の御校閲を得たこと、この講演に御後援くださった中外日報社とに、併せて茲に感謝の意を表します。同人敬白

京湖深草 洛南藝苑出版部



はしがき

昭和九年三月三十一日京都大毎會館で講演會が開かれた。それは竹田豊隆君たちの發起するところであつた。私は 神武天皇の健國の御詔勅の御教を受けさして頂いたのである。その講話を森卓明氏が速記してくれられたものに筆を加へたのが本篇である。竹田君はこれを印刷に附して會員にも頒ちたいと申されるので、喜んで本篇の公刊を同君に託したのである。

昭和九年六月八日

北安田にて 曉 烏

76W11031



神武天皇建國の精神

曉 烏 敏

神武天皇のことを知るには色々の資料がありますが、私は古事記と書紀とだけしかよう調べてゐない。それもたゞ度々本文を読んで貰つて聞いただけの知識でありますから聞き誤りのこともあらうと思ふ。今日は竹田君の招きに應じてこちらへ参りました、自分の最近の考を腹藏なく吐露して皆さんの教を請ひたいと思ふ次第であります。

古事記の書かれたのは元明天皇の和銅五年であります。書紀の書かれたのはそれから八年を経て元正天皇の養老四年であります。この時代に日本の

中心の思想の流れがどう云ふ工合であつたらうか、之を知るのが最初の仕事だらうと思ふ。

この頃日本精神と云ふことが相當に考へられもし、又その研究も發表せられて居る。私も十年餘り前から日本はどう歩むべきかと云ふやうなことを特に考へるやうになりました。詰り日本を考へるのに當つて、單なる日本といはず、世界に於ける日本の動きと云ふやうなことを考へるやうになりました。従來餘り好まなかつた歴史と云ふものに頭を向けるやうになつて、その後數度日本の國を離れて世界各國に足を踏み入れて見ますと、益々日本と云ふものを考へさせられるやうになりました。

日本を考へる時には先づ日本歴史を研究しなければならぬ。日本歴史を研究すると云ふことになりますと、先づ最初に日本の神代から始めなければならなくなりまして、神代の方の研究に頭を向けて來たのであります。併し書

齋に閉ぢ籠つて居ることの出來ぬ私なので、思ふ程研究に手を伸ばすことが出來ないのを残念に思つて居りますが、併し又色々の方にお會ひをしたり、色々場所に行くことの便利もありますので、極く歩みは遅いけれども研究の歩武が少しづつ進んで行くことを喜んで居るのであります。近來各方面に日本精神の研究が聲高に叫ばれるやうになりましたので、色々の方の教も出來るだけ廣く承はりたいと思つてをります。仕事の都合で講演會などには聴きに行く便宜を得ませぬが、雑誌とか新聞、或は著書などを漁つて、皆さんの御教を受けて居るやうな次第であります。

誰方のお話を聞きましてもそれ、獨特のお考があるやうであります。その考へられる方が日本人であつても、外國人であつても日本精神の一端を現はさないものはない、と思ひまして、相當に敬意を拂つて教を受けて居るのであります。

神代の研究をすると云ふことになりますと、是非、古事記と書紀に手を着けなければならぬ。その外出雲風土記、播磨風土記等もあります。それから舊事記とか或は上記と云ふやうな別傳もあるのです。後に出来たものとしては古語拾遺なども確かなものとせられてゐます。併し今日迄正統と考へられて居る書き物は、古事記と書紀と風土記位が大切なものゝやうに教へられて居るのであります。

所が、この古事記も書紀も純粹な日本そのものを記したものであるかどうか、これも一つ考へて見なければならぬと思ふのです。どんな歴史でもその作者の考をまるきり離れたものはないと思ふ。寫生文と云ふものがありまして、自然をその儘寫すと云ふのでありますけれど、その自然を把握して來る時に於てはその人の特別な性格と云ふものがそこに表はれるのであります。何にも抽き出さないでその儘にして置くならばそれでいゝが、自然現象の澤

山ある中の或ることだけを寫すと云ふことになると、それを發見すると云ふその人の性格と云ふものがそこに表れるのであります。だから寫生文と云ふものにも寫生する人がよく見えて來るのであります。古事記は稗田阿禮が語つたのだと云ひましても、その稗田阿禮と云ふ人の心持、又その古事記が記された時代の人々の心持、時代的色彩が少しもないと云ふことは考へられないのであります。書紀にしても一品舍人親王が編輯されたと云ひましてもやはりそこにその時代の背景がなければならぬ。一つの神武紀を披いて見ましても、古事記の記録と書紀の記録はやゝ異なる所があるのであります。近年中澤見明氏は、古事記は弘仁以後の作ぢやないかと云ふやうな考を發表せられました。それに對して反駁の聲もあり、又多くの正統派の學者はその説に取合はないやうでありますけれど、必ずしも中澤氏の説が根據がないとのみは私共は考へられない。さう云ふことを今私が茲で論じようとは思ひ

ませぬが、中澤氏の説によると和銅五年に古事記が書かれたと云ふのは重大事件であるのに、續日本紀の和銅五年の條に古事記の出来たことが書いてない。養老四年書紀の書かれたことは續日本紀に書いてあるのに、和銅五年に古事記の出来たことが書いてないと云ふことが、疑問の起點になつてをるらしい。又和銅五年に古事記が書かれて、それから八年後に書紀が書かれたとするならばその間にもつと聯絡がないであらうか、殊にその編纂者が共に一品舍人親王に關係があると云ふことであれば、尙更疑問を有つことが無理とは考へられない。併し私は今さういふことには觸れないで、古事記が和銅五年に書かれたものとし、書紀が養老四年に書かれたものとして、その時代はどう云ふ時代であるかと云ふことを知る爲に、先日家に居る人に續日本紀の元明天皇、元正天皇の條だけを讀んで貰つた。じつと聽いて居りますと、あの時代は大變に朝廷に佛教の味はれた時代であります。元明天皇も元正天

皇も共に女帝でましまし、さうしてこの朝廷の中心にどう云ふ思想が流れて居つたと云ふことを考へますと、大變佛教の思想の強く取入れられて居る時代であります。藤原鎌足は大化新政をした英傑であります、彼は元興寺にて初めて維摩會を起した。後暫く斷えて居つたが、その子の不比等の時分に又復活した。爾來長くそれが行はれて居つたのであります。經典は相次いで朝廷に於て講ぜられ、推古天皇の十四年に初めて朝廷で聖德太子が天皇の爲に勝鬘經を講釋遊ばし、又その年の秋岡本の宮で法華經を講釋遊ばしたのが朝廷にて佛教の講述の開かれた初めでありませぬ。それから餘り遠くない時分、舒明天皇の御代に朝鮮から來た惠隱と云ふ坊さんが朝廷で無量壽經を講じまして、孝德天皇の大化三年にまた再び無量壽經を惠隱師が講ぜられた。私は申す迄もなく眞宗の寺に生れまして、寺で育つて中學校からその上の學校迄宗門の學校で育つたものでありますから、親鸞聖人の御教によつて育

てあげられたのであります。それですから、まだ子供の時、無量壽經の讀誦を習つた時代からずつと今日迄この經を拜讀させて貰つて居るのであります。それで何を見ても直ぐに親しく讀んで居るお經と對照したくなるのであります。根柢に常に流れて居る自分の思想と、その思想の根源となる教と云ふものと、後に研究して行つたものと直ぐに同じか異なつて居るか云ふことを考へさせられるのであります。

古事記の書かれた時代にも書紀の書かれた時代にも、聖德太子以後にずつと取入れられた佛敎の精神が多分に流れて居ると云ふことを思ひます。殊にこの聖德太子の十七條憲法を讀みますと初めの第一條は日本精神を直接に書かれたものであります。第二條は日本精神を如何にして養へばよいかと云ふことから「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり」と示される。第一條に「和を以て貴しと爲す」茲に純日本精神を書き表はし、最後に「上和らぎ下

睦みて事を論らはんに諧ひぬるときには則ち事理自ら通ず、何事か成らざらん」そこに上下一つになつて、精進努力すると云ふ精神を發揮せられたのであります。此の日本精神を養ふ爲に佛法僧の三寶を敬へ、さうして終りには「其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直くせん。」とあります。これは日本精神の中心たる直毘の精神を發揮すると云ふ爲には三寶歸依と云ふことが大切だと云ふことを知らしめられたのであります。それではこれが實際の形を取る時にはどう現れるかと云ふと「詔を承けては必ず謹しめ。」はつきりと現人神としての天皇中心の精神が教へられる。それが吾々個人としての實際生活にはどう現れるかと云ふと「禮を以て本と爲せ」謙虚な態度ですべてを敬うて行けと云ふやうに書き示されて居るのが十七條憲法であります。この十七條憲法を讀んで居りましても私には直ぐに無量壽經と云ふことが考へさせられるのであります。

聖徳太子様は、勝鬘經と法華經と維摩經の三經を特別に御愛讀になつたのであります。今三經義疏と云ふものが遺つて居ります。その中の維摩經義疏の中には「唯除五逆誹謗正法」の第十八願の文を御引用になつて、それに基づいての見解をお述べになつて居ります。だから太子様が無量壽經を御覽になつたのは確かなことでもあります。有名な中宮寺に遺つて居ります天壽國曼荼羅の銘文の中に、太子が天壽國に往生せられたと書いてある。その天壽國は阿彌陀佛の淨土であることは確かであります。このことは拙著『聖徳太子の淨土觀』に詳しく書いておきました。

それから惠隱が無量壽經を請じたことの因縁もあつて、古事記、書紀の編纂の時には、法華、維摩、勝鬘の思想と共に無量壽經の思想も當時の學者の間に影響して居つたことを思ふ。私共妙に思ふのは、書紀を讀んで居りますと佛典のことを内典と書いてあることです。佛典を内典と書くからには、

あの書紀の記者が自ら佛典の中に居られたのぢやないかと考へさせられます。

遡つて、聖徳太子様の憲法の精神の最も淵源になるのは用明天皇の御精神である。書紀の用明天皇紀には「天皇佛教を信じて神道を崇ぶ」と云ふ言葉がある。神道と云ふ言葉は日本にもとからあつた言葉でなくて、支那の道教の人達が使つた言葉であるさうです。神道と云ふ言葉が日本の書き物に初めて現れて居るのはこの用明紀の言葉であります。さう云ふ點から見ると日本の國の佛教信者と云ふ最初の人用明天皇であつた。さうしてその佛教信者は神道を崇んだ。で佛教と云ふものと神道と云ふものが同時に茲に示されて居るのも注目すべきことなんでしょう。後になりまして、徳川の時代には神道と佛教と云ふものが別々のものゝやうに考へられるやうにもなつたのでありますけれど、最初には佛教と神道と云ふものが一つになつてゐた。勿

論、欽明天皇の十三年、百済の王様が經論及び佛像を日本にお送りになつた時に、天皇が群臣にお諮りになりました。その折には中臣及び物部一家の人は神道と別物のやうに考へましてこれを排斥しましたが、蘇我家の人は一つに考へてこれを崇めようとした。それで議が合はんで、欽明天皇は朝廷でお祠りにならなくて、之を蘇我家に下されました。次にお立ちになつたのは敏達天皇であります。敏達天皇は佛法には耳を觸れさせられなかつた。敏達天皇が若うて御崩御になつて御弟の用明天皇がお立ちになつた。用明天皇は「佛教を信じ神道を崇び」と書紀の記者が記して居る所を見ますと初めて茲に遠く百済から渡つた佛教と日本の神々の道と云ふものが一つであることを信ぜられたのでありまして、御病氣のうちにも、「朕は三寶に歸せんと思ふ」と仰しやつた言葉などが記されて居るのであります。この記録に依りますと、用明天皇様が佛教を信ぜられたのは、佛教を信ずることによつて

神道を崇ぶ心を明かにせられたことになりす。聖德太子様の上に於きましても、十四年にお經の講釋がありまして、十五年には天皇群臣を率ゐて神祇をお祠りになつたと云ふことを記されてあります。そのときのお勅語には次の通りに記してあります。

朕れ聞く、曩者、我が皇祖の天皇等の世を宰めたまへる、天に踰り地に踏して、敦く神祇を禮ひ、周く山川を祠りて、幽かに乾坤に通はす。是を以て陰陽開け和きて、造化共に調ふ。今、朕が世に當りて神祇を祭祀ふこと豈に怠りあらむや。

この勅語は十七憲法と共に攝政宮であらせられた太子様のお筆になつたものと思つてよいと思ひます。このお勅語の中にある「陰陽開け造化共に調ふ。」といふお言葉の上に太子様の神祇を祠らせられるお心が窺はれ

ます。

それから隋の國に、小野妹子を使におやりになると云ふこともこの年には
じまつたのであります。この順序を見ましても佛敎によつて神道を崇むと云
ふことがはつきりして居ります。その精神が最初に現れたのがこの十七條憲
法でありまして、その第一條は正しく神道、惟神の道をはつきりと示され
たのであります。

所が聖德太子以後千三百年すと十七條憲法の御敎が傳はつて居ります
が、この第一條が惟神の道を敎へて居ると云ふやうなことを餘り佛敎徒も、
其の他の方も注意してお出でにならぬやうでありまして、國學者や漢學者な
どは、聖德太子様は佛敎に心を奪はれて日本の惟神の道を忘れた方だと申し
ます。けれどもこれは憲法をよく見ないからさう云ふことが出るのぢやない
かと思ふ。憲法第一條は確かに惟神の道を太子様が簡單に包括せられたもの

と私は拜見して居る。それは書紀の上には、天照大神の御精神を和魂と
して示してある。「和を以て貴しと爲す」と仰しやつたのはこの天照大神
の魂を貴めと云ふことを敎へられたものと伺つて居る。純粹惟神の道が第一
條なんであります。

さうして又私共が第一條を見ますと「和を以て貴しと爲す、忤ふこと無
きを宗と爲す」と云ふお言葉そのものに、無量壽經の「天下和順日月清明」
と云ふことを思ひ出すのであります。「天下和順」、和を以て貴しと爲す、
和です、忤ふこと無きを宗と爲す、順であります。そこに「日月清明」清
明と云ふ言葉について直ぐに天照大神のあかき心、清明心と古事記に書い
てあります。その言葉を思ひ出します。さうして日の神の御徳が清明と云ふ
言葉で記されて居ることは、そこに何等かの關係があるやうに考へられるの
であります。

勿論書記の記録によりましても、天照大神の時から神武天皇迄百七十九萬何千年と云ふことであります。随分古い歴史であります。その天照大神の時に無量壽經の言葉が傳つて居つたとは思はれませんが、併し私にはこの無量壽經にある精神は既に數萬年前の日本に於て味はれて居つた心であると云ふやうに考へて居るのであります。

佛教と申しましても、小乗佛教と云ふ方は印度の釋尊が中心になつて居りまして、この世界に於ては印度の釋尊だけが佛様だと云ふやうに考へて居るのであります。大乘佛教 所謂發展佛教の方では、釋尊以外に澤山の佛陀がある。又印度以外のあらゆる世界に佛陀が出世して居られると云ふことを信じて居ります。さうなりますと、二千五百年以前釋尊が印度カピラバストに出生された以前數百萬年前日本にも佛陀が出世して居たらうし、又印度にもあつたらう、又エジプトにもあつたらう。其の他金星の世界にもあつたかも知

れぬ。若しくは火星の世界にもあつたかも知れぬ。一切衆生のある所佛が出世せられたと云ふやうに信ぜられて居ります。中に佛と云へば印度だけの教のやうに考へて居る人がありますが、これは餘程小乘的の考でありまして、佛と云ふ教はお釋迦さんが説かない前からあつた。あることをあると言つただけのこと、お釋迦さんが作つた教でも何でもありません。印度獨特のものでもない。とうの昔からあつた世界的の教である。ですから日本の遠い昔に佛があつたと云うても私はいと思ひます。だから日本の祖先のお心を書き表はすと云ふその文字と云ふものゝ上に餘程佛典の影響があつたものと云ふことを私はいと思ひます。

さう云ふやうに考が運ばれて來ると、神武天皇が都を橿原にお奠めになりました時に再發布になりました御詔勅を拜見致しますと、其の中に天皇が日

本の國をお開きになります御精神をお窺ひすることが出来るのであります。これと同時に吾々にはこの勅語の上に無量壽經の中にある阿彌陀佛の淨土を攝取し莊嚴遊ばす態度と云ふものを拜見するのであります。

殊にこの神武紀の初めに、天皇の御性質を示して、明達と云ふ言葉があります。私はこの書紀を読んで明達と云ふ言葉に特別の響を感じたのは、私の寺號が明達寺と云ふからであります。その明達と云ふのは、無量壽經に「智慧明達」とある。この智慧明達と云ふのはどう云ふ時に書かれて居るか、と云ふと下巻の初めのところ、「佛彌勒菩薩諸天人等に告げたまはく」と云ふ下に「至心に安樂國に生まれんと願する者は智慧明達し功德殊勝なることを得べし」と書いてある。眞面目に淨土に往かうと思ふ人の心は「智慧明達」であると書いてある。ですからこの智慧は願の上に現れ、「願慧悉く成満す」とあります。願の上に表はす前途を照らす智慧、丁度自動車のヘッドラ

イトのやうな行先をすつと照らして行く智慧であります。

書紀には神武天皇が建國の御精神を御示しになる勅語があります。この勅語は古事記には載つて居らぬ、どうして古事記に載つて居らぬか。古事記は稗田阿禮が語記してをつたことを録したのであります。この堅苦しい勅語などは覺えて居なかつたかも知らぬ。書紀は記録によつて記したのでからかれて居るのであらうと思ふ。併し應神天皇の時に初めて王仁が論語を持つこの勅語が書て來たと云ふのですから、それ以前に漢文の文字が傳はつてゐないのでありますから、書紀に書いてある御詔勅の文字はなかつたに違ひない。さうすると書紀の編纂された時に語り傳へられて居つた天皇の御言葉を書紀時代の漢文で書いたものであらうと考へられるのであります。

この勅語の中に私がちよつと目に着いたのは「恢廓」と云ふ言葉です。「皇都を恢き廓める」この恢廓と云ふ言葉を思ひますと、私は直ぐに無量

壽經の「恢廓曠蕩限極すべからず」と云ふ言葉を思ひ出す。これは上巻ではお浄土の成就して行く相を書かれる所に書いてあります。それから下巻ではお浄土のことになしに、この天地間自然の状態の如何にも廣々としたことを「恢廓窈窕」と云ふ言葉で書いてある。殊にこの上巻の阿彌陀佛の淨土を攝取し莊嚴して行かれます。その相に使つてある恢廓と云ふ言葉が天皇の御勅語の文字の中に使用せられて居ると云ふことに於て、天皇の御精神の如何にも大乘佛教の佛陀の精神そのものであると云ふやうな氣附をさせて貰ふのであります。

これはやゝ私事になりますが、私が此の神武紀を讀んで大變嬉しく感じてるのは、無論かう云ふことは偶然なことでありませうが、私の寺が明達寺、私の姓が曉烏、私の父は姓を定める時に人のつけない名を附けると云つてつけたのださうですが、此頃考へると父がこの神武紀を讀んで附

たのでないかと思ふ。神武天皇に烏は大變關係が深い、天照大神が神武天皇を輔佐する爲に八咫烏を態々お遣しになつた。さうすると曉烏はたゞの名でなしに天から命ぜられて、天皇の御精神を輔佐する爲に先達を仕るべきものであるのぢやと云ふやうなことを思ひ、附けた親自身は意識的ぢやないかも知らんが、無意識的にさうした名を選んだ所に私自身に對する一つの暗示が與へられて居るのでないかと云ふやうなことを此の頃感じて居るのであります。

或東京の知人が、或新しい宗教の人が自分は國常立神の末裔だと言つたことを聞いて、國常立神は天皇の御先祖でまします。吾々がさうした先祖を名乗るのは非常に不遜なことだ、それだけでもその方達の宗教と一緒になれない。自分は天皇をお迎へする猿田彦神の末裔である。私共は常に皇運を扶翼して天皇の御精神を先達仕ると云ふ心持で、猿田彦神の末裔である

と信じて居ります。かう云ふ話をせられました。尤も其の方は大變謹嚴な方でありまして、一言一句私共は謹聽するやうな方であるだけに尊といことに思つて居ります。さう云ふ一つの教によつたからでもありませんが、自分が曉烏と云ふやうなこともたゞ考へて居られぬ、と云ふやうに此の頃自分の名からも或一つの教を受けて居るのであります。

この神武天皇の御詔勅をいたゞきますと、よく阿彌陀佛の御精神のことが思はれるのであります。この御詔勅を読んで見ますと、

「我東を征しより茲に六年になりぬ。皇天の威を頼りて凶徒戮されぬ。邊土未だ清まらず、餘妖尙梗しと雖も、中洲の地また風塵なし、誠に宜しく皇都を恢き廓めて大壯を規り慕るべし。而して今の運屯く蒙きに屬ひ、民心朴素なり、巢に棲み穴に住みして習俗惟常となる。夫れ大人の制を立つる義必ず時に隨ふ。苟も民に利あらば何

ぞ聖の造に妨はん。且つ當に山林を披き拂ひ、宮室を經營りて恭みて寶位に臨み以て元元を鎮む。上は則ち乾靈の國を授けたまふの徳に答へ下は則ち皇孫正を養ひたまふの心を弘む。然して後に六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ひて而も宇とせむこと亦可からざらむや。夫の畝傍山の東南樞原の地を觀るに蓋し國の塊區ならむ。之を治るべし。」

我東を征ちしより茲に六年になりぬ——神武天皇は御歳十五の時に皇太子になられました、四十五歳の時に日向からお旅立ちになりました。豊前、筑前、安藝、今の岡山縣吉備を經られまして浪速國に着き、紀伊國を廻つて大和にお這入りになりました。その間六年と記してあります。これも書紀と古事記と年代等違つて居ります。

皇天の威を頼りて凶徒戮されぬ——あまつかみいきほひをかふむり、茲

がちよつと注意すべき所なんです。あまつかみは皇天と書いてあります。皇天の御威勢を蒙り、たゞ自分の力では仰しやらない。初めからお立ちになります時から御自分の力とは考へられない。初めに天の神様の御教を受け、兄弟の方々にお謀りになつて御出立になりました。途すがら獵をして居る人に、こつちから向うはどう云ふ工合にして行くかなどお尋ねになります。それらの人の言葉によつて段々お進みになる。天照大神が皇孫瓊々杵尊を豊葦原瑞穂國にお降しになる時の順序もその通りであります。先づ第一に天照大神は天神高御産巢日神のお告げを蒙られる、其の時にまたお告げを蒙つたゞけではない。思兼命と云ふ智慧の神様を召してよく考へられ、内省される、それから今度は八百萬神を召して御相談になります。この三つの順序を取られました。神武天皇も東征せられます時にやはり神のお告げを蒙り、天皇御自身も思索され、更に御兄弟に御相談になつて、皆さんがよから

うと思召したので出立される、出立されました後も到る處そこにある人達の言分を聞いてお出でになります。ですからこの時代からもう既に獨斷と云ふやうなことはないであります。

聖徳太子の憲法の第一條に「和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す、人皆黨あり、亦達れる者は少し、是を以て或は君父に順はず乍ち隣里に違ふ。」とある。所謂人に黨派のある爲に親父に不孝となり君に不忠となり、又社會の安寧秩序を害するやうになる。非常に黨派をお誠になつて居る、それなら黨派が要らなければ獨斷でおやりになるのかと云へばさうでない。「然れども上和ぎ下睦みて事を論らはんに誹ひぬるときには則ち事理自ら通ず、何事か成らざらん。」茲へ行くと上下心を打ち開いて、論らふは論じ合へと云ふことです。この論じ合ふと云ふことが先づ最初で言へば、天岩戸の前に八百萬神が御相談になつた。それから皇孫瓊々杵尊がお降りにな

る時に八百萬神に御相談になる、神武天皇が東征遊ばす時にも皆さんの御同意を得られる。これは日本の國體の一つである。だから憲法第十七條には、はつきりと「大いなる事は獨り斷むべからず必ず衆と與に宜しく論らへ。」とあります。此の頃日本の黨派と云ふものゝ弊害を頻りに論ずる人がありますが、私共さう認めて居ります。黨派は弊害があるから宜しくない。けれども、だからと云つてイタリヤやドイツに起つて居りますやうな獨裁と云ふことは日本の國體に合はないのであります。

明治天皇が明治二十二年に御發布になりました欽定憲法はその形は西洋の憲法に似て居ります。けれどもその御精神は憲法の前文にあります神明にお誓ひになりましたお言葉を頂きましても、又臣民に下されましたお勅語のお言葉を頂きましても、日本の大精神を發揮されたものと窺はれるのであります。この日本の精神から言へば上下互ひに胸襟を開いて語り合ふ、そこには

互ひに私の心を挟まない、事理自ら通る。大道理がそこに發揮せられて行く所に總べてが成し遂げられて行く力が現れる、と云ふのが日本精神なんです。ですから先づ初めに何をやつても自分の一個の料簡で事が始まらぬ。事が出来て行く時にも俺がやつたと云ふ感じが無い。やらせて貰つた。此の頃自力更生でなければいけないと總理大臣が申されます。あの言葉の意味は何でも政府に頼つてはいかぬ。自分でやらねばいかんぞと云ふやうなことであります。けれど日本の建國の精神から言つても自分で事をやると言ふ料簡がない。神武天皇が東征遊ばすについてもたゞ御自分で行きたいから行くこと云ふやうな思召ぢやなかつた。そこに天意を感じられ、神様の思召を受けられた。ですから既に都を橿原にお奠めになります際にも、自分で奠めたと仰しやらない。あまつかみのみいきほひをかうむりて、「かうむりて」と假名をつけてありますけれども文字は「頼」と云ふ字が書いてあります。眞

宗では「彌陀を頼む」と云ふことをやかましく言ひますが、頼と云ふ字に昔の國學者はかうむると假名を送つて居ります。神様の御威勢を蒙つて、と仰しやる。

之を讀みまして直ぐに思ひ出すのは、法藏菩薩が世自在王佛の前にお坐りになりまして、「光顔巍巍々として威神極りまします、是の如きの焰明與に等しき者なし、日月摩尼珠光の焰耀も皆悉く隠蔽して猶し聚墨のごとし、如來の容顏は世に越えて倫らなし。」かう先づ最初に御自分の御師匠のお徳を讚歎遊ばす、あの氣持を思ひ出さずには居られない。もと王様であつた法藏菩薩が世自在王佛の教によつて自分に驚きを立てられました。一個の修行者となられ、さうして世自在王佛の前に於て自分の願を述べられる最初に、この願は自分で發した願ぢやない。あなたの教に照らされて、私の胸に明かに自覺された願である。かう申される時に「光顔巍巍々として威神極りまします

す」この威神と仰せられて居ると、茲に神武天皇が「皇天の威を頼りて」と仰せられます。お言葉と相對照して、私共では特別の味ひを感じるのです。何事も神威を受けて行ふ、天の神のみこゝろを受けてさうしておほみたから、民の心を養ふ、これが現人神でまします日本の天皇陛下の御精神です。すから、日本精神と云ふものはこの天皇陛下の御代々々の御詔勅の上にはつきりと示されて居ることを思ひます。

色々の思想も起り、色々の事件も起つて参りますが、日本の國が聚まつてから二千六百年になる。と云ふことは、極く近く言つた迄で、日本書紀で言ひましても百七十九萬何千年と書いてありますから、もつと古いのでありませう。さう云ふ古い歴史を有つて皇統連綿として、所謂天壤無窮のこの國體は、外國の皇帝のやうに統治者とか或は征服者と云ふやうなものとは違つて、天皇が天意を受けて人意を全うすると云ふ御精神を表はしてお出でにな

るのであります。ですから萬世一系の天皇の中心の御精神が日本精神である。

或外國人等は、日本精神は大石良雄に現れるとか、切腹に現れるとか考へて、日本人は復讐心が強い、あれは戦好きぢやと云ふやうに考へる人もありますが、無論日本人は戦をする時にはしません、腹を切る時には切りませんが、復讐する時にはします。けれどもその中心の流をどこに窺ふことが出来るかと云ふと、この御代々々の御詔勅であります。そのうちまづ最初に神武天皇の御詔勅の上に大精神が明かに示されて居ることを思ひます。この「皇天の威を頼りて」と仰しやることを思ふと、神武天皇が浪速の方に舟からあがられまして、それから生駒山を越えて大和の方に這入らうとなさいました時に、天皇の御軍に利益がなかつた。それで兄君五瀬命は流矢に當つてお怪我をなされた。その時に天皇がお考へになつた、と云ふことを古事記には簡単に、

我は日の子である。それが日に向つて戦をしたから悪かつた、それで負けた。今度は日を後ろにして戦をしたならば有利であらうと云ふやうなことを思召して、浪速から船出をして紀州の方にお廻りになり、紀州熊野からずつと大和の方にお這入りになりましたと云ふことを書いてあります。所がこの書紀にはそれをもつと細かに書いてあります。

「今我ハ是レ日ノ神ノ子孫ニシテ日向ヒテ虜ヲウツハ是レ天道ニ逆レリ。退キカヘリテ弱キコトヲ示シテ神祇ヲ禮祭テ日ノ神ノ威ヲ背ニ負ヒ奉リテ、影ノマ、ニ壓躡ンニシカジ。カ、ラバ即チ曾テ刀ニ血ヌラズ、虜必ズ自ラ敗レナン。」

とあります。自分は天津日嗣であるのに天津日に向つて戦をしたのが悪かつた。ぢやから今度は考へを變へて、「弱きを示して」と仰しやるのであります。此の頃ハワイから子供を一人預つて來て居ります。これは日本で生れ

て向うへ行つてすつと育つた。十六歳ですが外の子供と喧嘩をして、負けても参つたと言はぬ、却々あやまらぬです。家内が一番先にそれを教へてやりました。日本では相模を取つても劍術をやつても愈々となつたら、「参つた」と言ふ、参つたとなれば直ぐ放す。所が西洋で育つた奴は参つたと言はぬ、参つた時も放さぬ。私はこの日本のよい所は参つたと云ふ所だと思ふ。其の代り参つたと言つたら放してやる。どこどこ迄も殺すのでない。刃向ふ者は討ち平らげることもあるけれども、これは自分の力で向うを殺す爲でない、活かす爲である。日本は戦をする、けれどもそれは敵を滅ぼす爲でない、敵と一つにならぬ爲、所謂和ぎの精神から出て来る。荒魂の活動は和魂から出て来る。天照大神の御精神から素盞鳴尊の活動が現れる。さう云ふことが「弱きを示して」と云ふこれだけの言葉の上にも私共よく味はれるのです。それから又次に、日をうしろにして日の影を躡むと云ふ、面白いで

す。お日様から自分が照らされて影が出来る。その影を躡んで行く、これが日本精神の一つの實行なんです。天照大神は鏡の上に御相を現し給ひて、汝等子孫はこの鏡をいつきまつること我をいつきまつるが如くせよ、と仰しやる。それは丁度神武天皇様が日をうしろにして自分の影を躡んで行かうと仰しやつた所以であります。

聖徳太子様は法華經の御講釋をお書きになる時にも、法華經の十如是の下で、「愚心及び難し、かるが故に具さに盡さず」十如是の一大道理を細かにお書きになつて、自分は愚かな心ぢやから、これは俺のやうなものは書けないと仰しやつた。そこに偉大な靈感をもつてお出でになる。太子様は、自分には愚かな心ぢやと仰しやる所に法華の十如是の偉大な精神を言はずして表はして居られる。だから憲法第十條には「共に是れ凡夫のみ」日本精神の根柢は、共に是れ凡夫ぢやと云ふことを教へられるのであります。それから法然

上人が愚痴の法然房と仰しやり、親鸞聖人が愚禿親鸞と仰しやる。かう云ふのは自分の影を見て進むのです。

だから弱きを示して日を負うて自分の影を踏んで進む、そこに非常に敬虔な態度がある。その態度に出でんとされる時にも天の思召を受けて神を祀つて進んで行かれる。

かう云ふ工合にして道を變へて紀州の方からお廻りになつた。紀州へお這入りになつて先づ熊野からお這入りになる時に、或る精靈の氣に打たれたのでせう。毒の氣に觸れて休んで居られる。その時に高倉下と云ふ者が夢を見た。それは高御産巢日神に天照大神が、どう云ふことか、この豊葦原瑞穂國が今ちよつと騒いで居る、何か事があるらしい。さうして武甕槌神を召して、お前行つて鎮めて來い、と仰しやる。武甕槌神は、私が行かいても私の代りに神靈の劍をやれ、と言はれる。あとから高倉下は倉の中に行つ

て見ますと、汝の倉の中に落すと云ふ告があつた通り、刀がちやんと落ちて居る。その刀を持つて來て天皇に捧げる、天皇はその刀を以てまたお進みになる、と云ふやうなことを書いてある。

それから又道を閉されて困られた時は、天照大神が烏に命じて、お前行つて先達をして呉れ、と云ふことを受けて烏か道を開いたと云ふやうなことも書いてあります。始終難局に立たれると直ぐかみわざがあるのです。

これは神代の大國主命のくだりを讀んで見ましても、大國主命が屢々生死の境にたゝれた時に、いつも祖神が力を副へては再舉せしめるやうなお助けがあるのです。

日本の古事記とか或は書紀に現れたる神代の記録をすつと見ますと非常に宗教的なんです。いつも自分は思ひます。或外國人が云うてをります。日本の留學生などに「お前の宗教は何だ、」と聞くと「私は宗教がない、無宗

「教だ」と言ふ者があるので、日本のやうに宗教のない國はないと云ふことを言ひますが、段々日本の國の歴史を讀みますと、日本の國程宗教的の國はないぢやないか知らんと思ふのであります。

私は此の頃よく日本には天照大神が鏡を授け給うた時に既に立派な佛教が弘められて居る。種は播かれて居ると云ふことを申します。これは後になりまして、兩部神道の本地垂迹の起つた根源であります。平安朝時代に起つたのは印度の佛様が日本の神として現れたと云ふ本地垂迹であります。鎌倉時代には、日本の神様が印度の神様として垂迹されたと云ふ説もあります。これは日本としては却々面白い説だと思ふ。私もさう云ふやうな工合に考へて見ることもあります。

兎も角も偉大な精神が色々の國に色々の形を以て顯現される、と云ふやうに私は考へて居ります。佛陀の自覺の教と云ふものは日本では天照大神が鏡を授けられる時が初めである。それからずつと常に天祐の下に動く、必然に動く、神意を畏むと云ふ所に我が日本精神の強さと穩かさがあるのであります。

私共子供の時に神社に参詣しますと、神主様が「つゝしみかしこみ申す」といはれるので、よく眞似をして居つた。あのつゝしみかしこむと云ふことが非常に尊いことで日本精神の一面を現はすのである。日本人が神を祀ると云ふことは自分の心持としてはつゝしみかしこむと云ふ心持なんである。蓮如上人が御文をお書きになりました。あそこに有難い所があると云ふことを思ひます。或人が仰せられました。「御傳鈔は有難い」「どこが有難い」と云ふと「あの云々のところが一番有難い、」斯う言つた人があります。面白い言葉であります。私は御文を毎朝讀んで居りますが、一番あとの「アナカシコ」が一番有難い。初めのこと

は皆附ごとで、あつてもなくてもよいが、一番あとの「アナカシコ」だけが大事なことであると思つてをります。だから御文七十九通に「アナカシコ」がある。日本の精神で一番大事な所は、「かしこみかしくみまをす」といふところにある。祝詞でも初めの所のことはどつちに書いてもよいが、あとだけは變へることが出来ぬ。大事なのはあの感じです。

神武天皇が東征なされた時分、「私」とは仰しやらない。茲に尊い所がある。東郷大將は、日露戦争の時にいつも「天祐による」と云ふ報告をお書きになりました。そこなんです、眞劍の生活者には人間以上の力が加はる、又必然の命を受ける。神武天皇が東征されましたのも、さうした氣持で遊ばしたことが分るのであります。

(休憩)

「皇天の威を頼りて凶徒戮されぬ、邊土未だ清まらず、餘りの妖尙ほ

梗しと雖も」まだ邊土の方はまづるはぬ所がある。まだ妖があるけれども、併し「中洲の地復風塵なし」鎮まつてみんな心が打ちとけて来た、和らいで来た。「誠に宜しく皇都を恢き廊め大壯を規り慕るべし。」茲が無量壽經に「恢廓曠蕩にして限極すべからず」と書いてある所であります。法藏菩薩が四十八願を立て、淨土を成就する爲に永劫の修行をなされます。その修行されて行く所にこの恢廓曠蕩と云ふ言葉が使つてありますが、丁度法藏菩薩がお淨土を建設されるやうな心持で神武天皇が此の都をお奠めになつたのでありますと云ふ風に考へられる。

茲に注意して置きますが、たゞ兩部神道の本地垂迹のやうな工合に、神武天皇が阿彌陀様である、と云ふやうな工合に私は考へて居るのぢやないのです。阿彌陀様は阿彌陀様であり、神武天皇は神武天皇である。併しその阿彌陀如來の精神と神武天皇の建國の御精神と云ふものが私共には一つに味

はれる。かう云ふことを申すのであります。神武天皇が阿彌陀様の化身だとか、阿彌陀様が神武天皇の化身だと云ふやうなことは私は考へて居らぬのであります。その點は御注意を願ひたい。たゞ一つの大きな魂が私には神武天皇の上にも仰がれ、法藏菩薩の上にも仰がれる。さうして又自身身の行手もそこに指し示されて居ると信じて居るのであります。

大壯を規り慕り、今の運——今の時運はどう云ふ時節であるかと云ふと屯く蒙く、混沌たるものである。おほみたからの心——民心とある、昔から民のことを「民」と書き又「元々」と書きますが、「おほみたから」と申します。私共の國では子供のことを譽めて、お父さんのたからぢや、おかあさんのたからだと云ひますが、可愛い子だと云ふことです。丁度日本の國では人民がおたからなんだ。よく日本の國は君主政治であつて、民主政治でない、と云ふやうなことを言ふ人がありますけれども、私はそれは間違ひで

あると思ふ。君主主義であつて民主主義である。又民主主義でもない、君主主義でもない。君民一体、そんな何主義と云ふことのないのが日本精神である。民はみたからであつて、上下一なんです。「上下心を一にし」と仰しやる所が本當。その精神が教育のお勅語に現れて居るのを見ましても「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」と仰しやる。あのお言葉を見ましても私は阿彌陀如來の願と云ふことを直ぐに思ひつくだであります。陛下は國民精神、所謂日本國民の指導原理をお示しになつて居るかと思へば、最後には御自分の願を述べて居られる。さうして御自分の願こそは本當に日本國民の指導原理、天皇御親らが、朕爾臣民と俱に拳々服膺して咸其德を一にせんことを庶幾ふと仰せられた。教育勅語は茲に中心があるのであります。この生きた御精神が日本國民の指導原理となるべきものであつて、この御精神が所謂民をおほみたからと呼べる、所以である。

「民心朴素なり、」まだ素朴だ、「巢に棲み穴に住み」東征の記録を讀みますと色々な者があります。中には尻尾のある人間が出て来たことが書いてあります。穴から出て来たり巢から出て来たり、色んなものが出て来たと書いてあります。色んな人種が居つたやうであります。日本民族のことを研究して居る人が色々考へて居りますが、神武天皇がお出でになる前にもう既に饒速日命がお降りになつて居ります。天孫民族の人も相當に遣入つて居られたやうであります。其の他に色々な人種もあつたやうであります。すべてをひつくるめてそれをおほみたからと御覽になる所は所謂和を以つて貴しとする偉大な御精神が現れてをります。そこへ行くと此の頃民族自決と云ふやうなことが國際聯盟などで唱へられて居ります。あの民族自決と云ふことは、非常に偏狭な國民の個人主義的考が、民族自決はなつたり或は國家自決になつて居る。そんなことは日本精神でない。日本の國民は、大和民族と申

しますが、この大和民族の内容は色々複雑なものです。どんな民族が來てもそれが皆大和民族なんです。この偉大な精神は、すべての野に住んで居らうが山に住んで居らうが、尻尾が生えて居らうが、それを攝取して一つのものにして行く、と云ふことが日本の建國の精神なんです。ですからこの精神から云へば、もつと太つて行く時はあのニグロ一等、眞つ黒けの人も亦白い顔をして居るアングロサクソンも皆日本人として見てやるやうになつて来る。私共現にさう思つて居る。大和民族と云ふ中には色々なものがある。ぢやから、今日では朝鮮人と内地人とが同化するとかせんとか、臺灣の支那系の人民が同化するとかせんとか云つて居る。それは餘程古くさい考へで、それは日本精神でない。日本民族自決、そんなことを言つて居るのは日本の神武天皇の、少くとも、巢に棲み穴に住む者迄も引つくるめてお出でになる御精神にはまだ適はんやうであります。大分神武天皇の御精神は大きいのですか

ら、どんな違つた者でも皆取入れて行かれます。それが聖徳太子の和を以て貴しとする、その包容力であるのです。

日本精神は一面に非常に偉大な包容力がある。或人が、日本と云ふ國はみんな人真似、儒教を貰ひ佛教を貰ひ耶蘇教を貰ひ、西洋の哲學を貰ひ、科學を貰ふ。みんな外から貰つて來た。之をみんな返してしまはなければならぬ。さうして純日本にならなければならぬ。かう云ふことを言ふ人がある。外から來た儒教にも暇出せ、佛教にも暇出せ、耶蘇教にも暇出せ、西洋の科學にも哲學にも暇出せ、さうして純日本と云ふものがあるではありませんか。中には、それぢやから日本は空虚だと云ふ。日本は決して空虚でない。さう云ふものをみんな取つて自分のうちに取り入れることの出来るのが日本精神である。これが恐らく萬國無比でせう。何でも世界中のよいものを皆取り入れる。そこは「之ヲ中外に施シテ悖ラス」と云ふ御精神がある。國は小さな

島であるけれども、その魂だけは非常に廣いです。それは所謂、上天意を畏みてと云ふ所にこの廣い精神が養はれ、又天意を畏む所に弱きを示すと云ふ自己自身悔い改めると云ふやうな氣持も自然に起つて來るのであります。先日秋の方に参りました、高杉晋作が久坂玄瑞にやつた手紙を見ました。が、その手紙は非常に情緒の深いものであります。久坂玄瑞は高杉晋作と相拮抗した松陰門下の高弟で餘り仲好くなかつたさうです。所がこの手紙には初めに、天下の事を考へると君を措いて俱に語る者はない。今君を兄と思ふ、未だ曾て私はさう云ふことを言つたことはない。自分は今迄學問して博學多才にならうと思つたがさうしたことは今思はぬ。どうかして御主人のお爲めになるやうになりたい。先生が今年へ這入つて居られることを思ふと私は實に泪がこぼれると云ふことなど諄々と書いて居る。之を私讀んだ時に、自我を主張して居る時には友達を排斥して行き、又學問を誇つて行か

うと云ふやうになるのだが、自分を外へ投げ出して、天下を考へると云ふ大きなものゝ前に立つた時には本當に謙虚な心で友達と親しみ寄ることが出来る。又學問してどうしようと云ふのでない。實にこの世の中の御用に立てばよい、かう云ふ心になるのだと思ふのです。

私自身考へると、自分がえらい者にならう、或は友達に負けない。かう云ふやうな事を思ふ時にはやはり小さな根性なんです。さう云ふやうな根性のある間は本當に日本精神を味はふことは出来ぬのです。近代の西洋の利己主義のもとをなす自我と云ふやうな考へ、これも内省的の自覺と云ふ時の自我は非常に大切なんでありませうけれども、それが物質的個人主義に基礎づけられて居る自我はつまらぬものです。近代人の煩ひはこの自我に縛られるところにあるのです。だから友達でも排他的であつてちつとも仲が好いことはいない。若い時分には互に學問を競うて居る。互に榮達を競うて居る。所が段

段私共年齢のせゐでもありませうが、友達の間でも勝つとか負けるとか云ふことは餘り考へない。又學問して偉い者になると云ふことも餘り考へない。みんながこの世の中に生れて來たのだから何とか仲好く行けんものか。どつちが偉うなつてもよいが皆仲好く行けんかな、と思つてをります。ぢやから色んな哲學とか藝術と云ふものは夫々草の花の色のやうなもので、梅は梅、櫻は櫻、蒲公英は蒲公英、莖は莖、咲いて居つてみんなそれが尊いものと氣付いて一緒になつて行けぬものか。違つた色合をその儘にして仲好く行けんものかなと云ふことを此の頃實は感じます。吾々が此の世に生きて行けるのは、自分の料簡で行けるのでなしに、何か大きな天意で各々働かせて頂ける、と云ふやうな不可思議の神の前に跪く時に友達とも本當に親しみ合ふことが出来る。又自分が學ぶと云ふことも、本當に世の中にみんな打解けて行く、その道を學ぶ、その氣持にならせて頂けるやうに思ひます。

高杉晋作と云ふ人は、流石明治維新の大業を考へる人だけあつて若い時分の手紙にも立派なことが書いてあります。茲です。大望を懐いて居る者は非常に謙虚な所もあり親しみも起るやうになるものです。近代人はそこへ行くと小つぽけな自我を主張して行かうとする爲に、どこへ行つても、膝つき合ひ、臂突き合ひして、小さい世界を作つて居るのです。今日の世界の悩みもそこにある。それを救ふと云ふのが、この大和魂、所謂日本精神の世界に於ける大使命だらうと私は考へて居ります。あらゆる違つたものをみんな攝取してみな一つに融けて行くと云ふことが日本精神の特別に尊い所だらうと思ひます。

「習俗惟常となる」これは習ひ性となる、その時の有様です。所がそれに對してどう云ふことをやらうか。一夫れ大人の制を立つる、義必ず時に隨ひて、苟も民に利あらば何ぞ聖の造に妨はん」茲に建國の對象になるべき

色んな者が居る、そのすべての者が皆おほみたからである。それが夫々のことをやつて居るが、それをどう云ふ工合にして行くか。その理想は、ひじりののりをたつ、ひじりは大人と書いてある。のりは制度、神武天皇の前にもひじりと云ふ思想があつたのです。義必ず時に隨ひ、ひじりと云ふものは時に應じて行く、時機相應です。茲にやはり變幻自在な所がある。日本精神は變幻自在で、茲に無數の精神活動を見る、固定して居らぬ。時勢を見てドーン、變つて行く。これが日本の國體の偉大な所です。固定して居らないから常につゞく、固いものは壊れる。變幻自在なるものそのものが日本精神であるとするれば、いつも非常の常がそこにある譯です。「苟も民に利あれば何ぞ聖の造に妨はん」どんなことでもよい、このおほみたからに利益のあることならばすべてが聖の造、「聖造」と云ふ言葉が使つてある。これは非常によい言葉で、聖と云ふこと、大人と云ふことが同じ工合に使はれる。

あの笠置の解脱上人が十三塔を建立された時に次のやうな發願文を書いてをられます。

……佛子生を神國に受け、形を釋門に解く。一期の間、合恩合義、二帝の徳、報いざるべからず。……爰に吾朝の濫觴を尋ねれば、皆天照大神の開闢たり。一代攝化を思はば、釋迦大師の出世ならざるはなし。如かず、二聖の方便を行じ、以て一國の恩義に酬いんには。是を以て、塔婆は是れ世尊の墳墓なり。般若は是れ神道の上味なり。恩を慕ひ徳を飾るは此より大なるはなし。

この發願文によりますと、天照大神は日本の國を開いたお方であるし、釋迦大師は教を開いたお方である。この二聖のお蔭によつて吾々は茲に生存して居ると信じてお出になつたのであります。解脱上人は丁度親鸞上人と同時代であります。それが天照大神とお釋迦様と併せて二聖と崇めて居られ

る氣持に、同感と云ふては失禮でありますが、さう云ふ言葉を此の頃見まして自分が此の頃考へて居ることを解脱上人はちゃんと考へて置かれたのを愉快に思つた。

民に利益のあることならば、何をやつて行つてもそれが聖の造である。國利民福と云ふことが一時流行言葉になつたことがありますが、それなんでありませう。

「且つ當に山林を披き拂ひ宮室を經め營りて、恭んで寶位に臨み以て元々を鎮めん」山や林を披いてそこに宮室を建て、寶の御位に臨み中心を定めおほみたからを鎮めむ、中心にじつと据る所があつてみんなの依る所を定める。これがあらひとがみでまします所以であります。一軒の家の主人でも、主人が餘りあつちこつち飛び廻ると家が鎮まらぬ。主人はやはりじつと坐つて居る方がよい。會社の社長でも、社長は餘り飛び廻らず、じつとし

て居る方がよいやうに、天皇が高御座に定まられる所に民を鎮めさせられる所以である。民全體の心を心としてじつと民の中心を鎮め給ふ、そこにみんなの依處が明かになることと思ひます。茲に所謂現人神としての天皇の存在の意義と云ふものが明かになつて來ますが、さう云ふ必要があつて天意が定まつたと云ふやうに考へるのは餘りに大外れた考のやうでありますけれども、天は神があり地におほみたからがある。天皇の御位と云ふものより大切な所以はそこにあるのだと思ふ。天意を現はし民意を現はしてそこに皇位と云ふものがあつて、現實の世界が中心を見出して行く、佛教で云ふならば方便法身の大切な所である。日本精神としては天皇陛下の本當に尊まれる所以であると思ふ。神武天皇親ら其の御精神を茲にお述べになつて居る。

「上は則ち乾靈の國を授けたまふの徳に答へ、下は則ち皇孫正しきを養ひたまふの心を弘む」どう云ふことをなさるか、先づ自分の今からして行か

うと思ふことは、上は則ち乾靈の國を授けたまふの徳に答へ、天照大神が皇孫瓊々杵尊をこの國にお降しになり、汝の子孫が永遠に治むべき所だ。天壤と俱に窮りなからうと仰しやつた。天壤無窮の勅語のことを思ひ出しませす。あの御精神に答へ奉り、又下は則ち皇孫のその勅を受けて此の世へお降りになりましてさうして正しきを養ひます心に添ひ奉りそれを弘めようとする。ぢやから自分が皇位に即くのは天意を弘めるにあり、先祖の意を弘めるにある。「朕推フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」とあり又「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」と明治陛下が仰しやつたやうに、天皇の御位に居られるのは天皇の思召を立て、行くと云ふのでなしに、上は皇祖皇宗のお心に答へ下はそのお心を承けて民と共に正しきを養ひたまふ所の心を弘げて行かうと思ふとあります。

「然して後に六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ひて宇となさむは亦可からざらむや」非常に大きな事です。京都の眞ん中に観音様のあるあの六角堂は、聖徳太子様御建立と承る。又法隆寺へ行きますと夢殿があります。夢殿は八角堂です。六角、八角はどう云ふ所から出たかと思ひますとやはりさう云ふやうな精神がこの書紀に用ゐられて居る言葉の上にも現はれて居ります。支那が世界のことを六合と云つたり或は八紘と云ふ言葉で表はして居ります。さう云ふ言葉から聖徳太子様が一つの殿堂をお建てになつても六角にして天下を表はす、或は八角にする。これも天下を表はす。小さな建物と云ふよりもその建物の上に世界を味はふとせられる。一微塵の中に全世界を入れると云ふやうな曼荼羅の思想と云ふものが、このお勅語の上にも現はれて居ります。

神武天皇が「然して後に六合を兼ねて都を開き」その都を小さな樞原に置

くのでなしに「八紘を掩ひて宇とせむ」それは宇宙を家とすることである。非常に尊といふことだと私は思ふのです。ちつぽけな考へでない。だから日本の國と云ふものは、この大八洲ばかりが日本ぢやない。日本人は常に太陽を崇めて居る。山本信哉さんが、神といふ字は日といふ字の轉化したものである。だから日本のすべての神は太陽を現はすと申してをられるのは面白い考へであります。これに反對する人も勿論あります。とにかく日本は日の本であつて日の丸を國旗としてをります。日の國と云ふ所に少くとも地球全体を日本と考へて居ります。日本精神と云ふことはこの地球を我が國と考へることです。或外國人が私に日本は侵略主義である。何故滿洲に日本の人民を持つて行かねばならぬのかと申しました。私は言つた、日本は侵略せいやならぬ敵國といふものは有たぬ。あんだ方はどう思つて居るか知らんが、全世界は日本のものだから侵略する必要はない。日本が日章旗を出したとき

に、とうに日本のものになつてしまつた。あんた方が知らぬだけのこと、とうの昔に日本の國の魂に這入つてしまつてをるので。あんた方も日本の同胞だと思ふから可愛がつてあげる。若し可愛がつてあげてもきかねば、又親の意見としてどんなことをするかも知れぬ。けれども侵略なんど云ふ怪しからぬことはせぬ。そんなことは別に心配せんでも滿洲でもどこでもドン行ける。又日本の國のやうな偉大な魂を有つた者は世界中どこへ行つても感心する。小さな精神を有つた者が行けば嫌がるけれどもこの大きな精神を有つた者はどこへ行つても、よくお出でなさいと云つて迎へて呉れるからそれで問題にならぬ。詰り吾々に一番大事なことは偉大な日本精神を自覺することでありませぬ。日本精神から云へば、全世界が我が家であります。それから世界中の人民は黒い顔をして居らうが白い顔をして居らうが、黄ない顔をして居らうがみんな同胞です。それにオイ兄弟と呼び掛けることが出來

るのが日本精神です。それが太陽を以て國をなして居る所以なんでありませぬ。

今日本精神を言つて居る人の中には小つぼけな考へを有つて居つて、佛敎を排斥せねば日本精神でないとか、科學は日本精神でないとか考へて居るものがをる。明治の初めには、チヨン髭を結はねば日本人でないと云うた人もをりました。日本精神をそんな小さなことに考へないで、少く共この神武天皇が八紘を家とせむと仰しやる、天の下を家とすると仰しやることを理想としなければならぬ。

日本の家族主義といひますが、これも變な家族主義になりますと、自分の妻と子供ばかりのことを思つて隣のうちの者はのつて居つてもそつて居つても構はぬ人があります。そんなちつぽけな家族主義は美點でも何でもない。大無量壽經の五惡段には、自分の妻子を捐て置いて、外の女の所へ入りび

たりになるのも罪だが同時に外から儲けて来て自分の妻子にはかり貢いで居るものも罪人であるとお示しになる。日本の家族主義には矢鱈に外から搾つて来て自分の妻や子供にばかり使つて居るやうなのがあります。さう云ふのは神武天皇の御精神と違つてをります。神武天皇は橿原に家を奠め給ふたがそれは全世界の家だと申されます。吾々自分の家を建てるにしても、世界中の者が来て使つたらよいと云ふ考へで家を建てたら、いくら大きな家を建てても誰も小言は言はぬ。外の者は這入ることならん、と云ふやうな家を建てるから、壊せ〜と言ひ出す。小つぽけな考へになつてはいかぬ。民族主義と云ふことも、國家主義と云ふこともつと偉大な精神でなければいかぬ。神武天皇が都を橿原に奠め給うたと云ふことは、全世界を家とする、この御理想があつたことを非常に尊く思ふのであります。

この八紘を我が家とする大きな御精神を以て皇都を奠めくれたのであります。す。「夫の畝傍山の東南橿原の地を觀れば蓋し國の塊區ならむ、」そこに國の中心を定め、さうして「之を治むべし。」天下を治めるもとゝする、斯う仰しやる。假に中心を定める、だからそれが京都へ來やうが奈良へ來やうが東京へ行かうが、どこでもよい。要するに天下が家だ。八紘を家とするさう云ふ大きな家だから「亦可からずや」と仰しやる。大乘佛敎的に云ふと、定めて定まらぬ。偉大な天地を開いてどこへ持つて行つても中心であります。

かたつむりどこで死んでも殼の中
天地間すべてを中心とすると云ふ偉大な魂で元々を治められる。

かう云ふ工合に神武天皇が橿原に宮居を奠められて最後に何をなさつたか。書紀の記録によりますと、天皇の一番最初の仕事として神社を建設されました。その御勅語は次の通りであります。

「四年春二月壬戌朔甲申、詔して曰く『我皇祖の靈、天より降り
 鑒りて、朕が躬を光助けたまへり。今諸の虜已に平ぎ、海内無事な
 り。以て天神を郊祀りて大孝を申べたまふべきものなり。』乃ち
 靈時を鳥見山の中に立つ。其の地を號けて上小野榛原と曰ふ。以て
 皇祖天神を祭りたまふ。」

この御詔勅を讀みますと、御位に即いて直ぐに天意をお伺ひになります。
 家を奠められて一番先に天をお祀りなさる。自分が茲迄來たのは天神のみひ
 かりが自分を照し助けたまうたからである。そこに先祖の靈を祀つて大孝
 を申べたまふ。教育勅語に「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ」
 と仰しやつた。神武天皇の御詔勅には忠と云ふことはない。大孝を申べ
 る爲に皇祖をお祀りになる。
 私等の郷野に行きますと、家を建てましても佛壇や神棚がない家は、納

屋だ、人間が住む所でないといふのです。所が近來は大きな家を建て、も納
 屋同然の佛壇や神棚のない所がある。先日も或地方へ行きました大變立派な
 五十萬圓かゝつて出來たと云ふ家を見ました。立派な西洋間やら日本間やら
 澤山ある。私は、佛間や神棚のある所はどこですと聞くと、案内した主人
 は、まだ出來て居りませぬと云ふ。ではお先祖のお位牌は何處に置いてある
 かと聞くと、粗末な子供部屋まだそれも押入の中になりました。私はその
 御主人に、私の地方では建物は出來ても佛壇や神棚のない家は納屋だと申
 しますが、と言つて歸つた。外のことは何にも言ひませんでした。かう云ふ
 方は何を思つて生きて居るのか、さう云ふのが近代的かも知れませぬ。吾々
 が苟くも世に處するに當り、自分と云ふものを本當に考へて見る時には、自
 分は何か大きな御力に導かれて居ると云ふことを考へずには居られない。自分
 の今の足許が明るく味へば味ふ程大きな御力を仰がずには居られない。そこ

に御先祖の神を祠ると云ふ心が出て来る。或書物に佛教の寺々で法事を勤める事は佛教から出たのでない。日本精神が佛教へ反響したのだと書いてあります。なる程さうも思へます。印度の佛教には年忌月忌が無やうです。

私共或時は、日本の既成宗教の佛教はいけない。印度のお釋迦様のなされなかつた法事を勤める。お釋迦様のなされなかつた葬式をする。こんなことを言つたことがあります。此の頃段々味ひますと、日本の佛教に月忌参りのあると云ふことは大變よいことなんです。さうして御先祖の法事をすると云ふことが佛教が日本的になつた、印度の佛教が日本の佛教になつた。日本ではどうしたつて祖先の靈を祀る。其の點で日本の神々は吾々の祖先であります。佛様は吾々の師匠であります。私は神と佛とを親と先生のやうな關係に考へて居ります。先生によつて本當に何を知らせて貰ふかと云ふと親の御恩の尊いことを知らせて貰ふ。それを知らせて貰ふことを思へば先

生の御恩が尊い。兩々相俟つて一つになる時にやはり「神佛」と云ふ言葉に偉大な力を味はしめるのであります。

この神武天皇の建國の御詔勅を頂きまして、今迄自分が習うて來ました佛教、殊に無量壽經に示された阿彌陀如來の御誓願、さうして阿彌陀如來が淨土を建てられたお姿を神武天皇の上に仰ぎ、又延いては自分自身の生活の上にもそのみ光を仰がせて頂くのであります。

今日は竹田さんが、お前の信心の儘を語れと云ふことでありましたから、自分の最近の喜びを表はす爲めに、神武天皇の御詔勅のお光を仰ぎまして、其の上私の仰ぎまつる所を述べて私の今日進んで居る道を聞いて頂いた次第であります。今日は丁度月末でお忙がしい中を皆さんが閑をあけて聞いて下されて大變有難う。又竹田君に、かうした會の開かれましたことを感謝致します。(完)

名家講演集

第七編	第六編	第五編	第四編	第三編	第二編	第一編
梅原眞隆先生述 本願の大道	大原性實先生述 凡人道の工夫	梅原眞隆先生述 自然法爾章講話	雲山龍珠、大須賀秀道、兩先生共述 指方立相の淨土の解決	曉烏敏先生述 神武天皇建國の精神	西田天香先生述 下坐の生活	梅原眞隆先生述 道は邇きになり
一部拾錢	一部拾錢	一部拾錢	一部拾錢	一部拾錢	一部拾錢	一部拾錢

發行所
京都都市伏見區深草一草深區見伏市都京
洛南教苑出版部
振替大阪一三七三二番
番二二七三一阪大替振

昭和九年七月五日 印刷
昭和九年七月十三日 發行
昭和十二年九月五日 再版

編輯者兼 洛南教苑代表者 竹田 豐 隆
發行所 京都市下京區櫛笥通五條南
印刷者 定池 由太郎
發行所 京都市伏見區深草一、坪町二一
洛南教苑出版部

神武天皇建國の精神

〔奥附〕

【定價金拾錢】（郵稅三錢）

信たき生!!書の験體

梅原眞隆先生推讚の
パンフレットを讀め

編一第

香光ハ壯嚴

版半菊

一部 十錢
送料 二錢
—(イロハ順)—

執筆者、泉藤藏、千葉馨三、小野寺作右衛門、渡邊絞藏、松浦長三郎、山本久吉、
宗教を語る人は多いが宗教を生活する人は少い。念佛する人は多いが念佛を生活する
人は稀である。素純によく聞法し黙々として念佛する昭和の妙好人とも云ふべき無二
の念佛者の信仰餘滴である。

編二第

淨華抄

版半菊

一部 十錢
送料 二錢
—(イロハ順)—

執筆者、泉くに、千葉よね、小野寺千代、渡邊泰、松浦修、山本ナヲ、島田春、
苦惱と涙とを通して美しく光るものは信仰である。本書は『泥中の白蓮華』を思はず
やうなきよらかにしてうるはしい女性念佛者の法悦集である。

!!め讀を録記活生仰

編三第

往き易き道

版半菊

一部 十錢
送料 二錢
—(着稿順)—

執筆者、山田權次郎、島田十郎右衛門、湯淺作造、高野外次郎、恒川庄次郎
念佛は無碍の一途なりてふ親賢聖人の御持言を身にしてみても生活の苦難と戦ひつゝ念佛
の白道をすたくくと辿り行く修道者の尊さよ。又力強さよ、厚い信念に生きる筆者の
面目にふられんことを。

編四第

薫染抄

版半菊

一部 十錢
送料 二錢
—(五十音順)—

執筆者、江口菊江、高橋とも、富島祥子、山田政子、脇山つね
「大いなるものゝ力にひかれ行く我が足あとのおぼつかなさや」と九條武子夫人は述
懐されたやうな信仰にめざめて念佛の白道をつゝまじやかに辿り行く女性求道者の修
道記録である。

發行所

京都市深草
一ノ坪町二一

洛南教苑出版部

掘替穴版一三七二二番

顯眞
學苑

出版發賣目錄

發賣所

洛南教苑出版部

京都市伏見區深草一ノ坪町二一
番替穴版一三三七二二番

研究雜誌顯眞學報	年三圓 各四	眞原性實祕事法門の研究	〇・五〇
學苑同人觀經定善觀研究	一・〇〇	小谷徳水佛青組織論	〇・五〇
學苑同人阿彌陀經研究	一・〇〇	松井了穩宗教心の社會的起源	〇・五〇
高千穂徹乘一週上人と時宗教義	〇・五〇	澁川敬應合掌の研究	〇・八〇
玉置新晃印度の大乗經典	〇・五〇	梅原眞隆皇太子聖德奉讚概説	〇・二〇
寺本慧達神社問題と眞宗	〇・五〇	玉置新晃菩提心論	〇・三〇
梅原眞隆親鸞聖人の三經觀	〇・三〇	服部教授國家の倫理形態	〇・五〇
藤枝昌道聖覺法印の研究	〇・五〇	佐々木憲徳佛敎の精華	〇・五〇
眞鍋廣濟地藏説話の研究	〇・七〇	竹田豊隆修道生活	〇・五〇
梅原眞隆眞宗相承の系譜	〇・四〇	津本鐵城道味小品	〇・五〇

梅原眞隆敎行證概説	〇・五〇	木下靖夫歸命の對象	〇・五〇
梅原眞隆敎行證序説	〇・八〇	藤季淫愚暗記返札の研究	〇・五〇
梅原眞隆御消息に現れたる親鸞聖人	〇・五〇	梅原眞隆歎異鈔の意譯と解説	一・〇〇
梅原眞隆親鸞聖人血脈文集の研究	〇・三〇	荻生隆三佛説四十二章經	〇・二〇
梅原眞隆末燈鈔の研究	一・〇〇	山原優牢獄を拜する心	〇・三〇
梅原眞隆聖容	〇・五〇	梅原眞隆自然法爾章講話	〇・二〇
梅原眞隆眞實の道	一・〇〇	梅原眞隆道は邇きにあり	〇・二〇
梅原眞隆歎異鈔に現れたる親鸞聖人	一・〇〇	梅原眞隆辨述名體鈔と其解説	〇・四〇
梅原眞隆意譯執持鈔	〇・二〇	梅原眞隆聖典講話	〇・五〇
梅原眞隆愚禿親鸞	〇・二〇	學苑同人阿彌陀佛	〇・五〇
梅原眞隆講本註釋歎異鈔	〇・二〇	學苑同人安心生活	〇・五〇
梅原眞隆覺信尼公と大谷廟堂	〇・三〇	學苑同人佛敎の原理	〇・五〇

大原性實讚	佛	偈	講	話	〇・五〇
荻生隆三愚	禿	禮	讚	話	〇・五〇
玉置賴晃孟	蘭	盆	經	講	〇・六〇
梅原眞隆大	經	五	惡	段	〇・四〇
高千穂徹乘	大	經	重	誓	〇・五〇
北島治夫無	碍	道			〇・五〇
玉置賴晃散	華	樂			〇・五〇
梅原眞隆他	力	更	生		〇・五〇
學苑同人眞	宗	の	教	義	〇・五〇
學苑同人修	道	の	清	規	〇・五〇
學苑同人眞	宗	の	大	意	〇・五〇
學苑同人菩	薩	道			〇・五〇
梅原眞隆鎮	護	國	家	と	〇・五〇
正法					二
梅原眞隆佛	に	親	し	む	〇・五〇
心					二
永井哲二轉	向	手	記		〇・五〇
佐藤來生聞	書	讚	仰		〇・五〇
鈴木法環淨	土	眞	宗	の	〇・三〇
極					二
永井哲二マ	ル	ク	ス	よ	〇・二〇
り					二
佛	陀	へ			〇・五〇
梅原眞隆覺	如	上	人	の	〇・五〇
傳					二
統					〇・五〇
大原性實淨	土	教	の	中	〇・五〇
心					二
問					〇・五〇
辻本鐵夫經	集	概	説		〇・七〇
梅原眞隆歎	異	鈔	概	説	〇・五〇
佐伯祐正宗	教	と	社	會	〇・五〇
事					二
業					〇・五〇
岡	道	固	宗	教	〇・五〇
意					二
識					〇・五〇

弘法こそ筆を選ぶ

不完全な尺八に依つて上達を望むは木に據つて魚を求むるに等し竹道に志さるゝ滿天下の諸彦の爲めに

尺八界のキング

琴古流竹道學館の尺八と樂譜を以て絶対責任を以て推奨します。

- 普及管 定價壹圓但し根無し延べ竹、正寸。
- 練習管 定價貳圓以上 拾圓まで 五圓以上は中繼
- 上級管 並品 定價拾五圓以上 短笛は三割安
- 特級管 上品 定價五拾圓以上 館長兼安洞童師銘入り
- 定價百圓より參百圓迄桐箱入り(館長箱書付) 參百圓以上應需

館長兼安洞童先生著琴古流新様式樂譜
傾料譜見臺使用、メリ全部付き、一拍子半拍子を區別し、尺八として手頃に改作し三絃ベタ付ケにあらざる新式樂譜。其他等、三絃等總て責任を以て御周旋しますから精々當營業部を御利用下さい。

京都市左京區百萬遍交又點上ル
大日本竹道學館本部營業部

電話上七〇六三番 播磨穴版六三三五九番

月刊二回 宗教時論の三大特徴

◆本紙は最も廉價なり。 壹年郵税共僅か壹圓！

◆本紙は最も明朗なり。 教界の全貌一眸に集る！

◆本紙は最も率直なり。 問題の真相を忌憚りなく語る！

全教界の支持を乞ふ

正法護持に全力を捧る本紙の支持と愛讀を乞ふ。
申込は振替口座御利用あれ。

京都市深草一ノ坪町二一

宗教時論社

振替口座大阪三五四二一

終